

The background of the image is a soft-focus photograph of a bedroom. A bed with dark, rumpled bedding occupies the lower half of the frame. In the background, a lamp with a white, conical shade is lit, casting a warm, yellowish glow. The room's walls and curtains appear to be made of wood or a similar warm-toned material, contributing to an intimate and cozy atmosphere.

【実話】

47歳・年収
1500万女の
隠された蜜事
元日本代表の
怪物に喉を締
められ、
私は絶頂の奈
落へ堕ちる

密録：サエ

【実話】四十七歳・年収千五百万女の隠された蜜事

―元日本代表の怪物に喉を締められ、私は絶頂の奈落へ堕ちる。

『リハビリテーション』

登場人物..

・私（サエ・四十七歳）.. 大手企業 of 管理職。年収千五百万超え。

夫とは平穩で幸せな生活を送っているがセックスレス。冷静で理知的だが、奥底にこの資質を秘めている。

・彼（タクヤ・四十七歳）.. 大手総合商社部長。元アメフト日本代表。ナルシシストで支配的。専業主婦の妻と一人の子持ち。

二十年前にサエを傷つけた結果、サエから自宅に「内容証明」を送りつけられ完敗した過去を持つ。

モノローグ…共犯者の告白

【サエ】

幸福は、時として残酷なほどに退屈だ。

朝、夫と交わす穏やかな挨拶。

手入れの行き届いた庭を眺めながら啜る紅茶。

職場では部下たちから「頼れる管理職」として羨望を集め、年収千五百円を超える社会的地位をこの手にしている。

私は誰から見ても、成功し、満たされた「光の世界」の住人だ。

けれど、この風（なぎ）のような平穏が続くほど、私の魂は静かに窒息していく。

温かい真綿で首を絞められるような日々。その中で、私の指先は無意識に、二十年前の「痛み」を探していた。

二十年前、私はタクヤに、跡形もなく壊された。

元日本代表のアメフト選手。その圧倒的な筋肉の質量と、人を人とも思わない傲慢な支配欲。若かった私は、彼の放つ野生の毒に当てられ、金も、心も、身体の尊厳までも、すべてを彼という祭壇に捧げた。

最後はゴミのように捨てられ、ボロボロになった心を引きずって、私は今の夫がいる「まともな世界」へと逃げ帰ったはずだった。

それなのに。

再会した彼は、相変わらずの「怪物」だった。

大手総合総社の部長という仮面を被り、完璧な敬語を操りながら、その瞳の奥には二十年前、私を開発し、蹂躪した時の、あのサディスティックな暗火（あんか）が宿っていた。

彼と視線がぶつかった瞬間、私の二十年間の努力は、砂の城のように音を立てて崩れ去った。

私の身体の隅々には、彼が刻み込んだ「屈辱」と「絶頂」の記憶が、形状記憶のように残っていた。どんなに夫に優しく抱かれても、心の最奥にある「渇き」は、彼の暴力的な愛撫でしか癒せないのだ。

ホテルのカードキーが緑に光り、重厚な扉が開く。

その瞬間、私は「立派な社会人」としての誇りも、「良き妻」としての良心も、すべて廊下に脱ぎ捨てていく。

さあ、リハビリテーションを始めよう。

過去を清算するためではない。今、この瞬間、ただの「無力な獲物」に戻ることで、私は私を取り戻すのだ。

【タクヤ】

成功という名の鎧は、ひどく無機質だ。

大手総合商社の部長という肩書きを纏い、何十億という金を動かし、牙を隠して生きる毎日。

世の中のすべてを手に入れたような顔をしているが、俺の腹の底には、常にドロドロとした破壊衝動が渦巻いている。

俺を満足させられる女は、この世界に一人しかいない。

二十年前、俺が中途半端に食い散らかして逃した、最高の「器」。

扉が開いた瞬間、そこに立っていたのは、誰もが敬うような気高さを身に纏った彼女だった。だが、俺にはわかる。その澄ました顔の下で、彼女の細胞一つひとつが、俺の「暴力」を渴望して震えているのが。

彼女は俺に一度壊されたことで、俺という「形」を魂に刻まれてしまったのだ。

俺たちは、お互いがお互いが必要としている「共犯者」だ。

俺は彼女を徹底的に蹂躪することで、自分の内に飼う怪物を鎮める。

彼女は俺に壊されることで、死んでいた生命の感覚を、無理やり蘇らせる。

「愛」なんていう、光の世界の言葉はいらない。

俺たちを繋いでいるのは、闇の中でしか見えない、もつと強固で、もつと汚濁に満ちた「共犯関係」なのだから。

準備はいいか。

さあ、二十年前に始めた「地獄」の続きを始めよう。